

「最花式土器」雑感

小笠原 雅 行

1 はじめに

「最花式」土器は、実体が不明な型式だと言われながら使用され続けてきた名称である（後述）。出土例が比較的多いと思われるのに、「中ノ平 式」とともに併記される編年表の中でも数少ない型式である（青森県教委1990）。そこで、研究史や近年の調査から、これまで成果や各人のとらえ方をまとめ、この型式を簡単に振り返ってみることにする。

2 研究史

最花式土器は江坂輝弥氏によって初めてその内容が公表された。氏は『歴史評論』において編年表の形で最花式を挙げ（江坂1951）、さらに『日本考古学講座』で設定の根拠を示した（江坂1956）。これはむつ市最花貝塚の出土資料を基にしたものであるらしいが、公表されることはなく、実際に例示されたのは森田村石神遺跡の資料が最初である（江坂1970）。それによると、最花式（円筒上層f式とも呼称）は3類に分類され、大木9式に併行するものとされた。また、江坂氏の当該型式の設定に先立つ1939年に発表された天間林村二ツ森貝塚の資料を用いて、角田文衛氏は「榎林式」を設定した（角田1939）が、江坂氏は最花式がこれと併行するものとした。その後、村越潔氏は円筒土器を整理・再分類し、江坂氏が設定した最花式1類を円筒上層e式とし、3類を標準的な最花式土器とした（村越1974）。また、この中で試案としながら、榎林式が大木8b式に、最花式が9式に併行するとの考えを示した。

それ以降、該土器型式について積極的に発言してきたのは鈴木克彦氏である。氏は三厩村中の平遺跡の調査の後、型式学的な観点から榎林式と最花式をそれぞれ2細分した（鈴木1976）。この中で良好な資料と見られる川内町野家遺跡出土例を組み入れた上で設定された中の平 式は、それまで不充分だった最花式の資料を充足させるとともに、具体的に知る資料となった。その一方で、問題となるのが榎林 式と中の平 式の型式としての独立性である。鈴木氏も述べているとおり両者は「近似する」ため、細分が可能か否か不明確な状況にあった。それを解消するため、出土例が増加した近年「層位事例」を基に当センター『研究紀要』第3号において、細々分を示唆しつつ3分類している（鈴木1998）。この中で中の平2式は前後型式の間を埋めるものとされているが、内容的には榎林式に近いものと考えられる。氏はさらに、中の平2式及び3式は大木9式と併行するものとされている。なお、この論考の中で大きな比重を占めている遺跡の一つに八戸市西長根遺跡がある。第4号竪穴住居跡からは床面から少なくとも第4層までは人為的に埋め戻されているとされ、それと共に多量の土器が出土し、大木9式の良好な資料である。蛇足であるが、報告書の中で小笠原善範氏は住居跡出土土器の層位差から、鈴木氏の中の平 式を大木8b式から9式にかけてのものとしているが、鈴木氏が細分の可能性を指摘した榎林式については細分できなかったとしている（小笠原1994）。鈴木氏の中の平式も含め榎林式の細分が妥当なものであるか、資料の蓄積を待つ必要があるとみられる。

また、柳沢清一氏は榎林式から最花式の変遷について触れ、江坂氏が3類とした口縁部に幅広の無

文帯をもつ広口壺形土器を榎林式としてとらえた（柳沢1991）が、多分に主観的な判断によるものと言わざるを得ない。

しかし全体的に見ると、永らく実体が不明とされた（鈴木前掲、小笠原前掲）最花式土器は、石神遺跡での江坂氏の資料提示や鈴木氏の中の平式の提唱によってほぼ共通認識が得られているといってよいだろう。最花式は大木9式と併行関係にあることは、すでに多くの先学によって指摘されてきた。当然のことながら大木式の影響は南の地域ほど色濃く反映し、出土比率も高くなる。時間差か地域差かという点も十分考慮する必要があり、類例が増加している現在、各地域での時間軸の設定作業が必要であろう。

3 土器の供伴関係について

供伴関係が明確なものとして、青森市三内沢部遺跡第22号床面出土土器、今別町山崎遺跡第8号住居跡床面出土土器、階上町野場（5）遺跡第12号住居跡炉・床面出土土器、同第15号住居跡炉・床直出土土器、六ヶ所村富ノ沢（2）遺跡第70号住居跡床面出土土器、同第102号住居跡床面出土土器、同第212号住居跡床面・床直出土土器、同第223号住居跡床面・床直出土土器、西長根遺跡第4号住居跡床面・堆積土出土土器などがある（第1・2図）。

青森県内において、最花式土器と榎林式との層位的な出土例はほとんどない。強いて挙げれば、八戸市西長根遺跡第10号住居跡第1～3層（最花式）同第4層以下（榎林式）がある程度である。これも下位の榎林式土器の出土量に比べれば、最花式土器の出土は少なく、安定した資料点数が望まれるところである。

4 土器の属性について

あらためて記すまでもないのかもしれないが、最花式土器の個々の属性をごく簡単にではあるが触れておく。

（1）器種：深鉢が圧倒的に多い。中・小型では頸部付近で内傾する広口壺形も目立つ。器種組成はこの両者で大半を占める。ごくわずかに鉢形や浅鉢形、注口土器が加わる。県内では未検出であるが、秋田県鹿角市天戸森遺跡では台付深鉢形土器があり、県内でも今後検出される可能性があると思われる。

（2）器形：深鉢では、最大径が頸部から胴部中央付近までにあり底部が小さくすばまったような器形がほとんどである。平縁と2～4個の突起からなる波状口縁があり、突起は先端が三角形形状のものと丸みを帯びたものがある。また、折り返し口縁も少数ある。口縁部に幅広の無文帯をもつものでは、最大径部から内湾した後、垂直気味ないしは外反して立ち上がるものが多い。また、無文帯をもたないものでは、頸部付近で内湾するだけのものが多い。折り返し口縁をもつものは、頸部の屈曲の度合いが少ない傾向にある。広口壺形土器は、口唇部の形状は深鉢形土器と同様であるが、折り返し口縁は無い。原則として口縁部には幅広の無文帯がある。口縁部は「く」の字状に屈曲するものと、直線的に内傾するものがある。前者では、胴部文様帯が屈曲部の最もすばまった部分までくる場合と、「く」の字状の下縁から施文される場合がある。そのため、最大径は頸部から胴部上半までのいずれかとなる。中には口縁部の外反度が強く、口唇部に最大径がくるものもある。浅鉢形や注口土器は点数が少ないため、参考程度に記すが、底部から口唇部に直線的に外傾したり、口唇部で内湾したりするよう

である。

(3) 文様:口縁部文様は、幅広の無文帯をもつものと縄文が施文されたものがあり、前者は胴下半部まで沈線文が施文されたものに顕著に見られ、後者は縄文のみが施文されたものに圧倒的に多い。器形との関連で言えば、広口壺形土器は前者が圧倒的で、深鉢形土器(折り返し口縁のものも含む)には両者がある。また、前者では鈴木氏(鈴木1998)のいうように、地文施文後に沈線を加えるものと、磨消縄文が施文されるものがあり、磨消縄文が施文されるものは、大木9式土器の影響が強く感じられる(詳細は別項)。馬淵川流域以南とそれ以北では採用される比率によって様相が異なるようである。

まず、無文帯をもつものであるが、無文帯の直下は刺突が巡るものとなないものがある。また半円状やリング状の突起がつくものもある。沈線文のモチーフは、縦方向の沈線での区画を基本とし、上部で連結すれば逆U字状となる。これは八戸市西長根遺跡の調査成果の中で小笠原氏が述べているように、最花式土器に層位的に先行する土器群の縦方向のモチーフを踏襲するものと見られるためである。この逆U字状が密になれば逆J字状が横に連結した文様となり、さらにそれが離れて施文されれば、「ステッキ」状となる。また、縦方向のバリエーションとしては、逆U字状(あるいは縦位)の沈線の上にU字状を合わせたものや、U字状の両上端が渦巻き状となるもの、U字状が連結し波状となったもの、上も閉じて楕円形状になったものなどがある。波状や楕円形状の沈線の内部には、刺突が加わるものもある。地文は単節縄文の縦位回転が圧倒的である。

無文帯をもたないものでは、折返口縁をもつものの中に顕著と言ってよいと思われるが、無文帯をもつものと同様の沈線文をもつものがある。しかし、それほど多いものではなく、地文のみが施文されたものが圧倒的に多い。地文はやはり単節縄文の縦位回転が多い。

5 まとめ

最花式土器は、他の型式に比べて、文様のバリエーションは少ないように感じられる。本型式の継続期間の問題もあるが、逆に言えば画一的な文様で構成されていたことを示すものであろう。型式の呼称の問題もあるが、中の平遺跡において「最花式土器」の代表的な器種である口縁部に幅広の無文帯をもつ広口壺形が出土していないことも誤認(柳沢前掲)の要因になっているものと思われる。中の平遺跡出土土器でこの型式内容が充足されるとも言い切れず、標識遺跡となっているむつ市最花貝塚でも層位的な裏付けは難しい(むつ市教委1983)。型式内容を網羅できるだけの資料数や層位的な裏付けと供伴関係の判断があれば別であるが、ほぼ同じ内容の土器群に異なる型式名を付与した結果といえる。「最花式土器」と「中ノ平式土器」のどちらが正しい呼称かという問題は紙数の都合もあり深入りしないが、先にも述べたとおり、前後型式に比べれば共通認識が得られており、型式として理解しやすいものと思われる。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1990 『図説 ふるさと青森の歴史』 など
- 江坂輝弥 1951 「縄文式文化について（その十一）」『歴史評論』33
- 江坂輝弥 1956 「各地の縄文式土器 - 東北」『日本考古学講座』第三巻 縄文文化
- 江坂輝弥 1970 『石神遺跡』
- 角田文衛 1939 「陸奥榎林遺跡の研究」『考古学論叢』10
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』
- 鈴木克彦 1976 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」
『北奥古代文化』第8号
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第3号
- 小笠原善範 1995 「西長根遺跡発掘調査」『八戸市内遺跡発掘調査報告書』7？
- 柳沢清一 1991 「「榎林式」から「最花式」（中の平 式）へ - 陸奥中期後半編年の再検討 - 」
『古代』第91号
- 青森県教育委員会 1982 山崎遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
- 青森県教育委員会 1978 三内沢部遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
- 青森県教育委員会 1992 富ノ沢（2）遺跡発掘調査報告書
青森県埋蔵文化財調査報告書第143集
- 青森県教育委員会 1993 野場（5）遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
- 八戸市教育委員会 1995 「西長根遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- 八戸市教育委員会 1994 「松ヶ崎遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集
- むつ市教育委員会 1983 「最花貝塚第3次調査報告」むつ市文化財調査報告書第9集

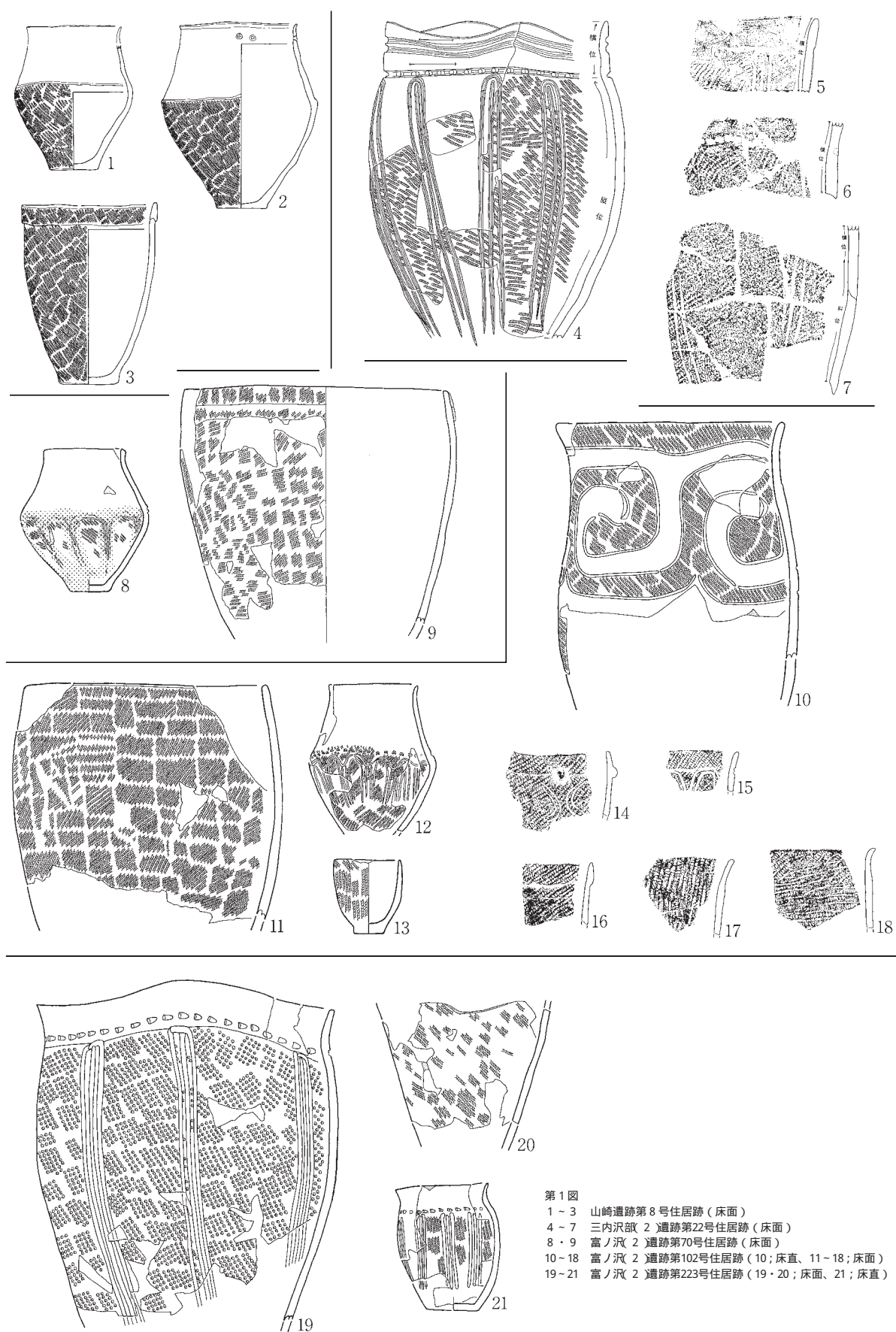


図1 最花式土器(1)

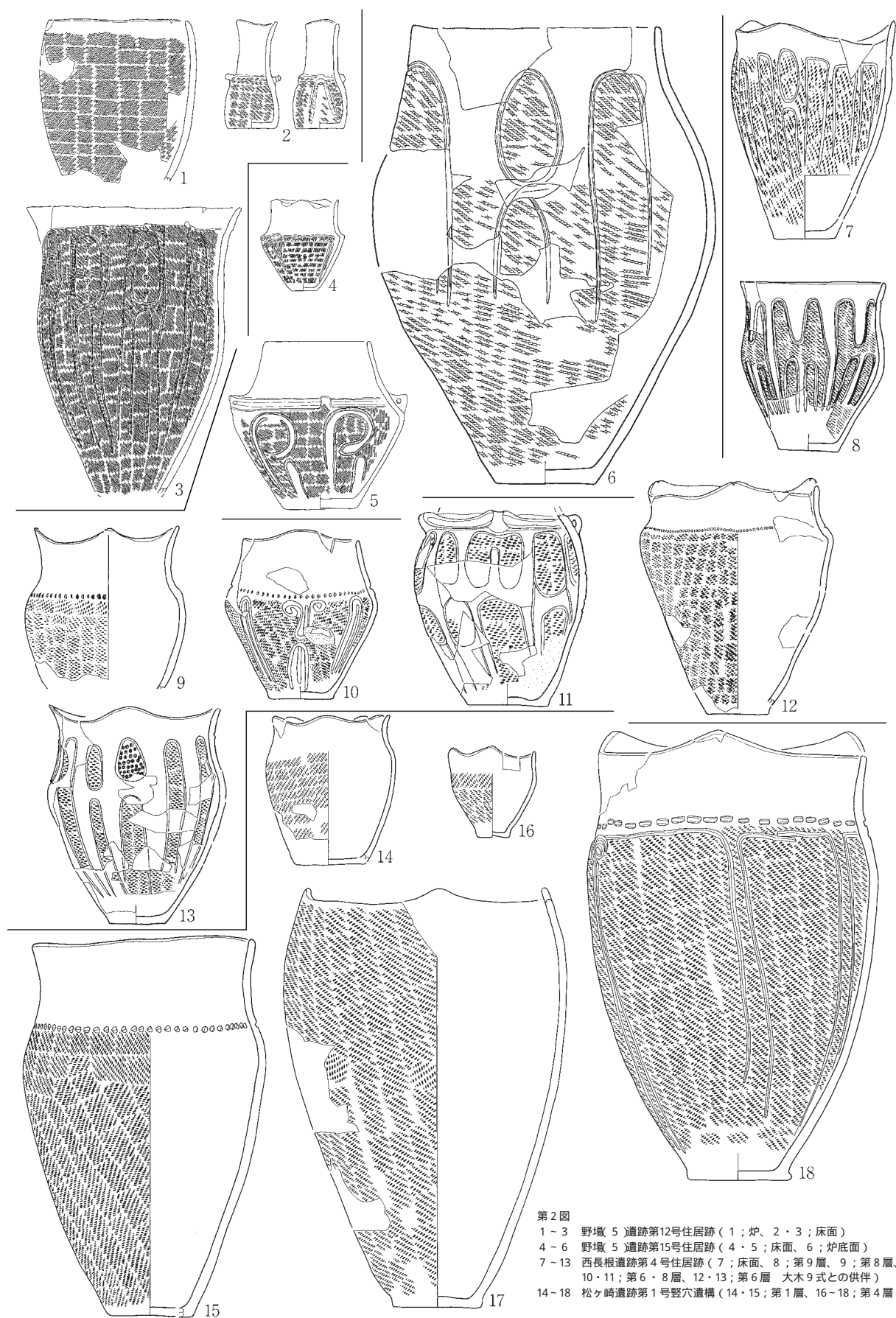


図2 最花式土器(2)